



消えゆく原風景 最古の「バスセンター」閉鎖

文と写真／柴田秀一郎

今 春、新宿バスセンター“バスタ”の開業が話題になったことは記憶に新しい。いっぽう若手県の盛岡バスセンターは、自動車ターミナル法の適用第一号施設として、昭和35年に開業した日本最古のバスセンターだ。若手県は北海道を除いても面積が広い県なのに、鉄道網の営業キロ数が少ないので、バスは重要な乗り物である。

バスセンターは、どこに行くにも起点になるので、県民にとっても旅行者にも懐かしい場所である。建物は3階建てでコンクリートで飲食店、売店、喫茶、時計店の昭和レトロ感が満載であるが、さすがに建物の老朽化が著しいので、壊すことが決定して9月末日までの営業期間となった。代替施設は未定で、営業最終日もお別れイベントなどは行わないと聞

ている。

ネットで過去の思い出をシェアしている方も多く見受けられた。現存しない飲食店、特にカレー屋さんの記事が多かった。火災により創業当時の写真が焼失したと聞いている。57年の長きに渡って親しまれたバスセンターはひっそりと引退する。詳細は本誌122ページで。



● ストープを囲んで、たこ焼きをみんなでつつきながら食べるのが楽しみな場所だ。残念なことに6月末に閉店した。



● 山口百恵との共演で青春スターだった、1970年代当時の三浦友和のポスターが輝く吉田時計店。

● 6月の初夏の夕暮れ時に撮影した公衆電話ボックス。時代を遡って赤電話当時は、10円玉をじゃらじゃらさせたご婦人の長蛇の列を想像しながら、シャッターを押した。





57年の歴史に幕 幾万の人々を 迎え見送った 盛岡バスセンター

昭和35年4月の開業以来、雨の日も風の日もバスを迎え、市民の憩いの場を提供してきた盛岡バスセンター。長年の利用で建物は老朽化が進んでいたが、旧きよき時代の名残りとして町の人に愛されてきた。そんな昭和の象徴が、来たる9月30日に閉鎖される。人々の生活を見守り続けたバスセンター最後の姿を、カメラマン柴田秀一郎がカメラに収めた。

文と写真／柴田秀一郎

東北最大、そして日本最古

センター内では売店や喫茶店、時計屋、そば屋やラーメン屋、たこ焼き屋などの飲食店など、郷愁を感じる昭和レトロな店舗をたくさん見ることが出来る。これらのお店では57年間、見知らぬ人たちの会話が盛んに交わされてきたのだろう。昭和の庶民が主役の光景が容易に想像できる場所だった。

店舗の中で出色なのは、売店と時計屋である。どちらも、バスセンターのオープン当初は出店しておらず、売店が開業から遅れること4カ月の昭和35年8月オープン、時計店は昭和42年に店を構えた。売店に並ぶ看板には、かつて旺文社で出していた週刊誌の広告もあった。「週刊現代」の広告も見つけたが、見たこともない古いデザインのロゴだった。売店のご主人によれば、お店に並ぶお菓子の

広告などもそのほとんどが、現存していないそうである。

ここまで昭和レトロ感が満載の建物にもかかわらず、市内をまわる巡回バスから東京盛岡を繋ぐ長距離バスまで迎え送ってきた、現役で稼働している施設なのだ。非常に奇跡的で素敵だ。

「もしかして、大手の遊興業者が古いバスセンターを買い取り、昭和風のテーマパークにしたんじゃないか？」と妄想してしまいたい。ここにはまだ、あの日から地続きの昭和が生きているのだ。

さて、サラリと開業57年と言うが、これはすごい歳月である。新聞などで「52年前の東京オリンピックが云々」という記事を見ただけでも隔世の感にびっくりするが、それよりも数年古いのだ。

盛岡バスセンター開業時のニュースは、オンライン動画共有サービスの「YouTube」で観ることが出来る。当時のニュースを観てみると、時代の空気が写っていてとても興味深い。

女性の服装も時代遅れをとおり越し、逆にモダンだ。開業を祝って、まわりの乗用車や軽トラはデコレーションが施されているようだ。花電車ならぬ花自動車と言ったところか。ああ、映っているバスもすべてボンネットタイプだ。若い方の目には、新鮮に映るかもしれない。

これまでバスセンターは東京、大阪、名古屋などの大都市には存在しておらず、鉄道網の未発達な北海道、九州など一部の地方で見受けられる程度であった。バスセンターそのものがローカルな存在だったのだ。

今春には「新宿バスタ」ができ、ようやくバスセンターの重要性が認知されて話題になってきた。そんな年に、日本最古のバスセンターが何のお別れ式典もせず、ひっそり閉鎖されるのは寂しすぎる。

日本最古のバスセンター、昭和の象徴。ようやくバスセンターという存在が脚光を浴びる状況になりつつあるのに、老兵はただ消えゆくのみなのだろうか？

「バス停留所」をめぐる 解説●柴田秀一郎

福島県いわき市久ノ浜町「北町」2002年4月 新常磐交通

●ワンちゃんが塀の上に居て、布団まで敷いてあって、そのことに驚きました。犬は高いところが苦手なはずだからです。この地点は3.11の津波による被害が大きかった場所でした。



北海道上川郡比布町「北3線14号」2007年4月 道北バス

●厳冬期にここでバスを待っていたら、命が危険だと思われる場所でした。これは4月のあたまの撮影ですが、吹雪いていて驚きました。



北海道留萌市三泊町「三泊神社」2007年4月 沿岸バス

●この日の夕焼けは最高でした。生涯忘れぬ場面になりました。往時は漁業と留萌港からの石炭の積み出しで、栄えたそうです。バス停の名前の由来になった神社は廃業して今はありません。



福岡県飯塚市「忠隈」2006年9月 西鉄バス

●筑豊炭鉱として、大変著名な場所のひとつです。ポタ山の所在地を調べて撮影に臨みましたが、現地で見たとこ普通の山と違いありませんでした。このバス停のある場所は、五木寛之の「四季奈津子」の舞台でもあります。



新潟県中頸城郡清里村(当時の地名)「青柳下」2004年12月 「くびきのバス」

●中頸城郡の地名がなくなって、上越市に合併されるとの情報を持って、駆け付けて撮影した1枚。ちなみに翌月から上越市清里区に地名が変更されました。



福島県いわき市市田町「天の川」2002年2月 新常磐交通

●地名がかっこよくて、そのいわれも、「星が綺麗だったのと、ホテルが沢山居てそれが星に見えた」そうで、この地名になったそうです。なんて素敵なことでしょうか。その後のバス路線の廃止ももったいないです。現在はバス停も待合室も撤去されて残っていません。

柴田秀一郎写真集

「バス停留所」バス停、追憶の光景

「バス停マニア」とも言える写真家の柴田秀一郎氏が、日本全国をまわり集めたバス停の記録。費やした年月は12年間、収録されたバス停は188箇所にもおよぶ。郷愁の念をかきたてる、どこか懐かしいバス停たちの姿。幼いころ見た光景が、ページをめくるたび甦ってくる。リトルモアブックス 本体価格2500円(税別) A5横 196ページ



●喫茶店。閉店後の静まった店内、きれいに並べられた椅子のレトロ感がたまらない。蜂蜜メニューが売りの盛岡の老舗藤原蜂蜜のお店だ。残念ながらバスセンター閉鎖より一足早く6月末に閉店した。



●「You Tube」で創業時の記録映像と比較してみよう。バスがセンターに入ってくるシーンで、昔と違うのは車体だけ。当時街中を走っていたのはボンネットバスだった。



●路線図はいつ作ったのだろうか？ こんな古めかしいロゴ、見たことがない。パソコンでも出てこないフォントだと思う。ロゴとデザインが、不思議な世界に誘ってくれる。

●乗務員控室には、バスを廃車にする際に取り外した椅子たちが使われていた。夏なのに、何故かストーブが鎮座している。さすが東北地方。



●講談社の週刊現代のロゴは見た記憶がないほど、古い。なんとも、風情があり過ぎるほどだ。